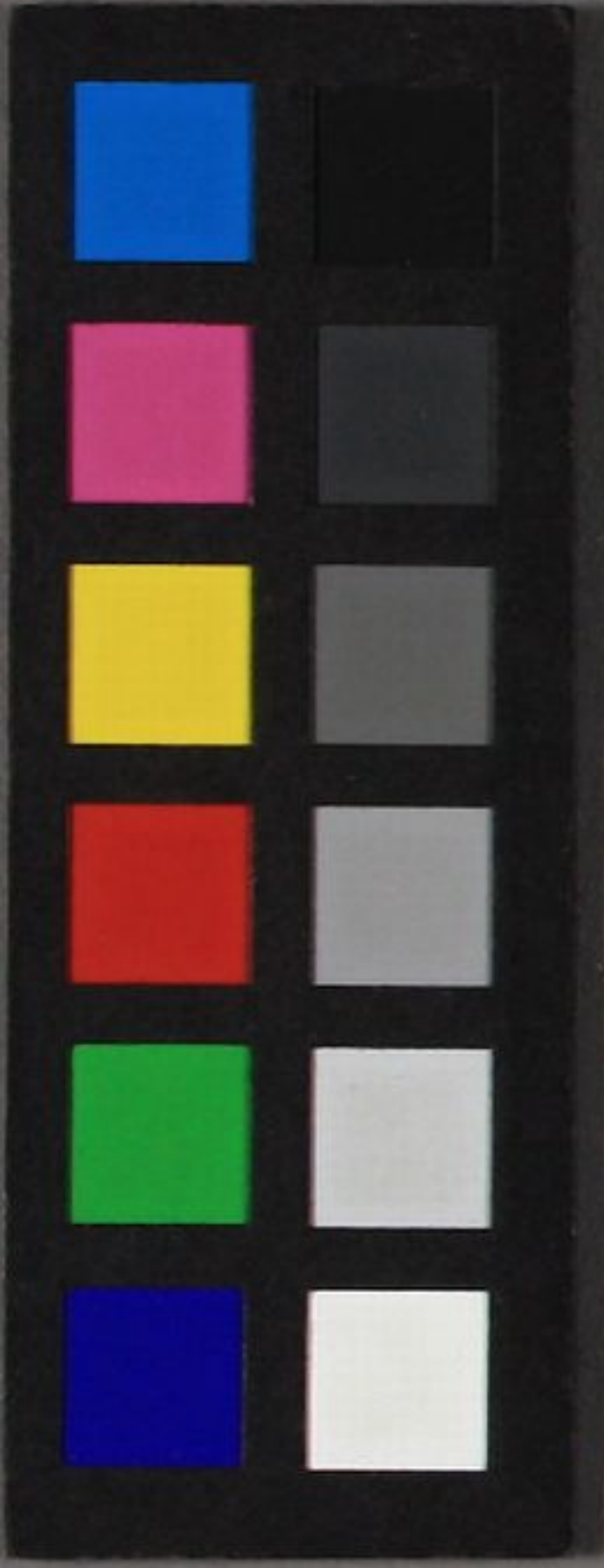


詩集社詞華集

秋





詩集社詞華集·秋



5, 7, 11



詩集社詞華集・秋・目次



尾崎喜八……………二

山中地溝帯で

中西悟堂……………四

底の知れんおやぢ

勝承夫……………八

舊友に

井上康文……………一〇

休日

崩れゆく人生

子

池永治雄……………一五

父と子

銅像

米倉勇美……………一〇

斷想二つ

永岡敏……………三三

伊香保にて

秋・女と

木村達二……………二七

匪賊と賣春婦と

慶州にて

大連にて

平井實……………三三

新鮮・五月

永田泰三……………三四

静かな家

春不二雄……………三六

嵐・自然の暴力

郷里を立つ

小川十指秋……………三六

思想のむしほを抜く日



山岸武三郎

四〇

土の詩  
飛行機

上野一郎

四三

テバートの屋上で

加藤一郎

四五

道

宮崎緑雨

四七

或風景

孤獨

生命

地上

杉本英夫

五〇

農民の詩

砂丘

三澤彌

五三

槐エノキ

細川昊

五五

白雨

石川榮一郎

五五

シルエット

住川成子

六八

短章五篇

露木陽子

六三

拒否する

颯爽たる朝

女の歌

井上淑子

六六

居きまに

影

運動會

運動會



岡村須磨子……………

身邊雜記  
兒は逝く  
秋

詞華集・秋

詩集社版



## 尾崎喜八

## 山中地溝帯で（秩父）

しづかな秋がすべての峰々を黄に赤に照らしてゐる。  
 陰はいちはやい冬のむらさきだが、  
 おだやかにそそぐ朝の日光を浴びて、  
 今年最後の草の花は谷間の霜に傲つてゐる。

私を見る古生層の山々よ、  
 溪谷にそつて私のゆく白亜紀層の道よ、  
 丘の斜面にかかつてゐる幾つかの平和な部落よ、  
 今朝私はお前達から優しく迎へられる客だ。

私は感謝する。そしてお前達の若い主人は  
 かしこから皆つつがなく歸つて來たか。  
 けだし吾々がのがれて、しかも彼等が強ひられる苦痛を思はず、  
 彼等の土地の美をわたくしする事は出來ない。

私はいとはない、今私の歌に不調和の響のまじる事を。  
 吾々にかかる時代に生きてゐるのだ。  
 そしていつか眞の平和が人々の生活を祭にする時、  
 はじめて別の口々から全き歌が叫ばれるだらう。

（一九三二年十月十七日）



## 中西悟堂

## 底の知れんおやじ

霧が動いとるのか山が動いとるのかようわからんし  
 風が吠えとるのか山が吠えとるのかようわからんが  
 どれもこれも人間のまぢがひで

山は昔から動かんのう

にんげんの考はちつぽけなもんで

小屋がふつ飛ぶといかんとか

煙草がしめつてけふで三日も喫へんとかいふとるが

雪溪の底に隠れた秘密などはもうわからん

戸口はめりめり鳴つとる

屋根の石は谷をめぐけて飛び散つとる

が、こんなことでもなけりや思ひつかんのは

氣象と山とのものがたりじや

氣象はけふで三日も不機嫌じやが

おらどものおやぢの山は

氣象學者や地質學者が想ひも及ばんやうな

大膽不敵な静まりやうじや

際限もない大あらしのなかで

煙草も喫ひたい、石楠花の花も見たい

谷をへだてた峰のすがたも見たいが

結句たのもしいのはおやぢじやのう

時間のなかで頑張つて

頑張りとほして骨を見せて

いくらでもいくらでも骨があつて



底の知れんおやぢじやのう

よつばしほがま

海拔一萬尺の屋根道に花を咲かせた  
わづか三株のヨツバシホガマが  
紅くれないと紅とまを燈し合つてかたまつてゐる。

その上をわたるものと言つては

高瀬の谷から吹きあげる風と、霧と  
岳鴉だけがらすの黄白こくびやくの翼ばかりである。

ときどき過ぎてゆく登山者たちが

彼女等の前にルックザックをおろして

雷鳥の噂などをするばかりである。

花はひととき

互ひに耀かせ返す花莖のシャンドリヤは  
種簇をのこすための辛いつとめだ。

高層雲のなかで花を擎ささげて

孤獨そのものの高貴を生きる

この草の暮し方も市井に遠い眞實の一つである。

(東鎌屋根にて)



勝承夫

舊友に

秋の即興詩の一つ

盃

秋茄子の皿

僕は長い友情を嚙みしめながら  
君との貧しい卓を圍む

君の盃に酌ぐものは僕のノスタルヂヤ  
君の言葉は熱をおびて旅の牧水を語る

『白玉の齒にしみとほる秋の夜の  
酒は靜かに飲むべかりける』

秋茄子の皿をひきよせて  
しみじみと秋の友情の酒盃をかたむける



## 井上康文

## 休日

日曜と祭日の二日續きの安息日、  
 彼等のプログラムは無數に展がる、  
 溪谷と山の秋——地圖は慾望を擴大させる、  
 トラックもフィールドも競技が白熱してゐる、  
 疾驅する馬に集まる視凝と熱狂、  
 帝室御賞典<sup>カップ</sup>盃が燦然と光つてゐる、  
 マチネーでは秋のレビューが華麗な世界を描き出す、  
 ピアノもヴァイオリンも今夜はすばらしく幸福だ、  
 ボクサーはリングでラッシュする、

彼と彼女は秋に躍動しクリンチになる、  
 野球は小雨で中止になつたが、  
 さて家の中ではわからない活動が展開される、  
 いたるところに享樂と陶醉と讚美がある、  
 だが僕たちのプログラムは白紙だ、  
 靜かに秋の雨が降つてゐるだけだ。

(一九三二年十月十六日)

## 子

貪り食ひたい鳶色の秋の風景のやうに、  
 逞ましい連嶺の山肌のやうに、  
 清冽な流れを泳ぐ若鮎のやうに、  
 みのりきつた秋の風景の中で、



空を裂き、野を美しくする小鳥のやうに、  
花から密へ、青い空に點描される蝶のやうに、  
花屋の飾り窓の中に咲く絢爛な花のやうに、  
健康と純真と快活な活動の中に、  
彼女たち、君の子と僕の子がゐる。

(一九三二年十月)

### 崩れゆく人生

文化の中に多くの犠牲がある、

人間の造つた機械が人間の力を奪ふやうに——。

彼は困憊と失望の暗い顔をして、  
まだ幾月にもならない新婚の住家の荷物を纏めてゐた、  
本も机も壁の額も、

彼等の愉しい生活の中にあつてこそ生きてゐた、  
だが、がらんととり亂され部屋の中では  
それらの何もかもが埃りつぼく死んでゐる。

——大東京になつてもいい事はありません、  
彼の父は彼の顔を寂しげに見て笑つた、  
そのために失業した息子とその新妻が、  
空虚な寂しい笑ひの中で頭を垂れてゐる、  
まだ、若い働きざかりの彼の仕事をもぎとつて、  
惨めな生活の重荷が更に彼を待つてゐる、  
こんな寂しい光景を友の上に見やうと私は思はない。

失業してゐる父と不具な兄と、母と妹達のために、  
彼は二人だけの住家を閉ぢて、



その親や兄妹と住家を一にしなければならなかつた、  
 若い元氣な愉しみの多い生活を壞體して、  
 彼等は苦難へ出發をしなければならぬ、  
 どんなにしても彼は肉親のために腕一つで働かなければならぬ、  
 だがこの不安な社會の中に何があらう。

私は崩れてゆく人生の一角に立つて、

健氣にも立ちあがらうと悶き苦しんでゐる彼を見た、

私は彼等を慰める言葉が、

この世界に何一つないことを悲しんだ。

私は空しく彼等の失はれてゆく住家を出た、

靄のたちこめた原つばの上に、

半かけらの秋の月がぼんやり光つてゐた。

(一九三二年十月)

## 池 永 治 雄

### 父 と 子

その人は盲目だつた

その人は自己の天分を信じてゐた

その人は眞剣に自己の道を開拓してゐた

その子は七つばかりのあどけさだつた

眞赤な着物をきて手をそろへ

童謡を歌ふ聲は勢いつぱいだつた

それは親と子とへの絶大の拍手となつた

聴衆は親子の交情に魅せられたのだ



父なるその人の肩はふるへ

父なるその人はみえぬ眼に歡喜をたゞよはせ

その人の子はすなほにおじぎをした

父なるその人は子への愛情を頬にうかべ

子のあとから丁寧に挨拶した

初秋の音樂會の夕であつた

拍手をあびて

父と子とは頭をさげたまゝであつた

## 銅 像

彼はその昔えらい人だつた

彼はふるくからこゝにたつてゐた

彼は刀に手をかけて

この街を監視してゐる筈なんだ

彼は色々な仕事をした

その當時彼の前に皆は平伏した

彼は死後までも充分報いられたんだ

月日は彼を青くさびさせてしまつたんだ

或る人は讚嘆し、謳歌した

或る人はそれを六ヶ敷しく批評した

しかし子供等は

彼を友達としか考へてゐなかつた



詩

集



## 米倉勇美

## 斷想二つ

—或は『僕自身の神』—

## (1)

秋の澄み切つた陽光ひかりの中に

僕は僕自身の寂しさを考へてゐる。

露にぬれた大きな葡萄の房が

青と紫の不思議な輝きに充ちて

僕のさびしい生命いのちをゆする。

風もない、音もない、静かな朝！

僕は子と一匹の虫を見付けた。

—一九三二・二〇—

## (2)

何かしてゐないと淋しい僕、

何か？……

僕はこのさびしさに詩を作り俳句を創む。

俳句は僕を自省させ慰めてくれる。

僕の詩心はかくして漸次に僕を掘り下げてゆく。

僕は——泣けない僕の魂は、凝つと自分の姿にみいる。

どうにもならない巨きな力、こゝに僕の神が在る。

無限の、絶対の、僕自身の神が。

葡萄つづらな朝風よ虫一つゐる。



## 永岡敏

## 伊香保にて

おい、と呼んだら

おい、とかすかにこたえるものがある。

昔、悲しい鯉の物語りが生れたと云ふこの温泉宿のですりにもたれて、  
ぼくは、

秋の山に呼びかける。

まるで犬ころかなにかのやうに、

生活を失つたぼく、街の灯にたゞれたぼくの心だ。

このまゝではやがてほろびる日が来る、

旅に行つて、この沈滞した心を癒して来やう、

山を見れば、又あたらしい意欲は燃えるかも知れぬ。

と、来たのではあつたが――

こゝにもむせ返る脂粉の顔と、レコードの喧騒と。

どこにぼくの求めて来たものはかくれてゐるのか、

どこに昔のきれいな情調が保たれてゐるのか、

あまりにも未期的な、粉飾された温泉街だ。

何處まで行けばこの心が癒るのか、

この頽廢を清める水は何處に流れてゐるのか。

しみ〜と蹠に感じる秋の冷たさである。

おい、おい、

――こゝに一人山へ呼びかける男がゐる。



## 秋・女と

1

女は、向ふから

山を越えてやつて来た。

曼珠沙華が盛りであつた。

ぼくは、どうにもならぬことばかり考へて、毎日ねたり起きたりしてゐた。

誰でも、時には水が欲しいことがある。

甘いものに飽いた後とか、

辛いものを飲んだ後とか。

——ぼくは、女が道々折つて来た曼珠沙華をごりぐりと食べた。

——にがい、にがい接吻であつた。

2

女は男の本能を満たすための道具ではない、さう云つて、あいつは去つて行つた。たうもろこしの實る頃であつた。

ぼくは、

あいつの残した言葉をくり返し乍ら

茄子の丸漬をさかかなに酒を飲んだ。

——男と女とのいとなみをあんなふうに解釋することは正しいであらうか。

あのすばらしいしぐさを、

息づまるやうな饗宴を、

割算の九々で割り出さうなんて。

女と云ふ奴は淺憊で、いくらか本でも讀むとすぐのぼせて、勝手な理窟をつけては男を困



らせやうと試みる。

男にだけあつて女には本能がないとでも云ふのか、馬鹿らしい。

秋であつた。

たうもろこしの葉に、月が光つてゐた。

ぼくは、ひとりで酒をのんだが、

酒はひとりで飲むものではなかつた。

—一〇・一〇—

## 木村 達 二

### 匪賊と賣春婦と

長春の夜は暗い

遠くで匪賊を威嚇する機關銃

外を原始的なすすゝをならしながら

美しい支那服の女をのせてゆく支那の馬車

——さうして窓の小さい部屋で

娼婦李は

『十七の時だまされて來たの

郷里は朝鮮 早く慶州の父母のところへ歸りたい……』と云つて

乳戻をふるはせてすゝり泣くのである



——あらしの中の小枝の梨のやうに——  
彼女の小さい机からはみ出してゐるのは

日本の兵士からの手紙

そして彼女の肉體はかなしくも

日本と満洲と朝鮮のにほひがするのである

怪しく蠢く長春の夜景よ

今ごろせまい盛り場の支那の遊廓ビヤウリに

支那服のはだけた間からブ羅斯を出した女と煙草を吸ふデートルリツヒまがいの斷髪と

狐のやうな目をした女が

豚肉と共に公然と陳列され取引されてゐる事だらう

おお街は兵亂

そして私の心も肉體も兵亂

最初の童貞は

彼女の前に戦く。

——長春にて——

## 慶州にて

ポブラは赫土の川のほとりに兵隊のやうにならび

アカシヤは

白い路に丸い蔭を投げれば

白衣の朝鮮人はその下に居ねむる

棉の花は白日の夢の如くあはく

畦道にカササギはゆつたりと舞ふ

そして小高き土饅頭に

永遠を眠る民簇たち

あばかれし王陵よ 御影石の高麗犬と塔と

鮮童の賣りつける古き瓦と……



おおその中に新羅の舊都はねむる  
華麗なる黄金の冠と共に。

註 慶州博物館に發掘せる新羅王の黄金の冠を陳列す。

## 大連にて

銅羅はなる

銅羅はなる

惜別のテープは美しき蛇の如く身もだえ

送別の歌に

少女の純白な手巾はぬれた白バラ。

さらば満洲よ

甲板のてすりに倚れば

心なき海風は徒にわがネクタイをひるがへす

消えてゆく水脈よ 消えてゆく思ひ出よ

鬱積した煩惱を大連の海深く投げ捨てるために

素朴で巨大で新鮮な生活意慾を得るために

はるばると満洲の地へやつて來た私であつたが

甲板のてすりに倚れば

愛慾の苦き思ひ出のみ

重くわが心をおほふ。



## 平井 實

## 新鮮・五月

ひよう——ひようひようひよひよひよう  
ほうら出た、出た

お、い、子い、子

夜は朗らかにはればれと明け渡つて  
妻が子供に小便をさ、げてゐる

煮メのわらびがうまうまと煮立つて

汁の實のうどが高い香りをはなつてゐる

河岸で露草をはむ牛の毛並も、そのつやを光らせて

初夏、五月の早朝であつた

昨日迄の疲労と倦怠を蹴つて

ぴんとした健康にはね起され

その、とてもすばらしい目覺めの視野の限りに  
僕は見た

光りと力に充ちて

今日の、明日の、その生活の將來が  
裕く、深く、涯しなく

いつも新鮮で充實してゐることを。



## 永田泰三

## 静かな家

湖のやうな空の奥から浮び出た月の周りに  
雲が水鳥のやうに群れ遊んでゐる親だ。

この家の庭に草が影と一緒に揺れてゐる、

時々、花々の影が苔の上へにじみ出て

亂れた草の葉末にかき消される。

その叢くまむらの間に晝間の雨に濕つた飛石が

圓い甲こうらを並べてうづくまつてゐる。

立木に縫つて庇へ這上らうとしてゐる夕顔は

霧雨のやうな空氣の中に白い花を點してゐる。

風が寝返りを灯つ度に桐の大きい葉が

板屋根へ觸れたり離れたりしてゐる。

燈あかりが消えて静まつてゐるこの家の一方の窓に

簾すだれが小波のやうにたまたま揺れて下つてゐる。

あちらの萩が細く伸びて川端に涼み、

其處の馬追は小川の笛の音を貫いて鳴いてゐる、

星達は空に顔を映してそれに聞惚きよぼれてゐる。

月は青い光の羽衣を地上に落して

遠い遠い天をつゝしみ深く泳いで行く、

この夜更、この静かな家に

あの月が訪れて來ればしないだらうか。



## 春 不 二 雄

## 嵐・自然の暴力

亞熱帯の南島の嵐が陰惨な饑餓色に濡れたどす黒い恐ろしい空でビヨ／＼と吹き巻くつてる  
嵐 自然の暴力！

忍苦に研かれた骨と皮の村人は 闇鬱に喚きを立て 黒塊のやうに 叩き潰されて泥まみ  
れになつた家の中で うごめき騒いでゐる 大粒の涙滴が骨髓を刺す

吹き巻くる暴風は キビを粉微塵に粉碎してしまつた芋畑は 悲慘にも洪水のために 蔽  
はれてしまつた

年貢の強請取立と 税金滞納の督促令状と 借金と過重の烈しい労働に 立つ瀬も無いほ  
ど踏みにじられた今の農民に おゝ嘘でも微笑めるだらうか？

それに拍車をかけた呪はしい嵐 自然の暴力！

僕は自己の存在を意識し 闇の中に 闇を凝視する僕の姿を發見する

## 郷里を立つ

暖かい馬天の砂濱に寝て 遠い昔を偲ぶ

海！それは僕の心の涙 心のなごさ

僕は淋しい心を抱いて都へと旅立つ

冷たきは いつの夜も 人の心！

僕は心の涙を 泳ぎ悲しみを捨てる

あ！いつも變らぬ馬天の海！

馬天の磯の出汐に啜り泣く僕は

思慕と微笑の日影に 暗い佗しい僕の家を見詰める



## 小川十指秋

## 思想のむしばを抜く日

おれの思想のむしばがもみきりのやうにきりきり痛む風の日

おれはこの執拗な虫けらのなにてあるかをしりはじめた

食ふことにさへ痛みを覚えるたゞさへ痩せこけたおれのかほだが

根こそぎにしてやるんだ

弱いかんじやすいしんけいをこめかみごと引抜いてやるのだ

風がいらいこむ洞穴をこしらへてやるのだ

食へなくしてやるのだ

その暗いおくのほうから 白いあたらしい根が

葉つばや果實をかみしめるしつじつな根が

なにもものにも堪えうる頑丈な根が

血の通つた白い石のやうにのぼつて来るまで

放りつばなしにして置いてやるのだ

穴をあけてやるのだ

叩きわつてやるのだ

歪むだ思想のかほがあんたんとした人生の薄日のはてに蹠ろけるときがあつても

おれはもはやあのえんまんな義齒いれはにごまかしに欺されはしないだらう

らくがきのやうなおれのかほが

よしやどのやうに嚙はれても

おれはあの白いあたらしいつやの根を最後までしんじるのだ。



## 山岸武三郎

## 土の詩

やあでつかい甘薯だなあ

燃える赤土の畑に出て

俺あ父に呼びかける

俺と同じ気分でもつて

父も今日は居るのだな

父は振りかへつて微笑かへす

土の上で、こゝろ裸になれば

すべらな俺だ

俺あ、すたれ者の唄でも歌はふ

太陽はまひるの空で

なにか云つてる。

(一九三三・一〇・一三)

## 飛行機

夜の青い空にまぎれてとぶ

たゞ一點の星にしか思はれない光

私の肩につかまつて

それを母は見えないといふ



かつては私の泣き聲を遠くの丘でき、わけてくれた母  
 それだのにあのばく音も秋の響も  
 わからぬやうになつたであらうか  
 どぞどぞと私の肩をた、かれる

赤い着物を慾しがつた妹よ

こつちにおいで

あの光りと響きのわかるのは

私とお前だけなのだ。

なぜ母よ

見えた見えたといつて下さらぬ。

(一九三二・二〇・六)

## 上野一郎

### デバートの屋上で

デバートの屋上で

底冷えの秋の夜氣にうたれてゐる。

右手の山の頂きの二つの灯は

あれは對米館と萬松樓。

あれは金持の道樂息子の享樂場、

われわれの生活とははるかに縁遠い、

不必要な存在だ。

友よ、下界をみよ、



この騒々しさをみよ、  
 血みどろなひしめきをみよ、  
 往還にこそわれわれの眞の生活の死闘があるのだ。

私はしつかり金網の柵を握つて、  
 足を踏みしめ、午後八時の十字路の雑踏を見下した。

—昭和七年十月七日作—

## 加藤 一郎

### 道

サファイアの空、すがくしい秋の朝、  
 白い洗面器の水は齒にしみる、  
 引き締つた皮膚に透明な秋風の接吻、  
 二ひら、三ひら、散つてゆくのはプラタナスの葉か。

あはたしく散るものよ、散つてゆくがい、  
 永い苦難の務を終えて、やがて来る——季節の重壓。  
 散つてゆくがい、僅かに春の喜びの夢を抱いて、  
 ヒラ、ヒラ、プラタナスよ、散つてゆくがい。



あゝ、身近にせまつた冬よ、わびしい私の心、  
 そつぜんと散り去つたもの、氣輕さよ、  
 私には苦難の道は永い、果しなく擴けてゐるこの道、  
 冷々と秋風の吹きすさぶ道、  
 荒れ狂ふ吹雪の待つてゐる道、  
 恐れてはならない、ためらつてはならない、  
 そつぜんと散つていつた木の葉の様に、この身を捨て、  
 眞直ぐに元氣よく、この道を歩もう。

秋風にプラタナスの散つてゆく朝、  
 サファイアの空は次第に残忍な冬の相貌に變つてゆくのだ。

## 宮崎緑雨

### 或風景

ニッポン テイコク バンザイで  
 子供は健で秋晴です  
 母親は臺所で コトコト夕繕の仕度です  
 とつぶり日は暮れたのに  
 ハツピ装のお父つあんはまだ歸つて來ない

ヨゴレタ ボロ服で

子供は朗で素白しい夢を夢見てゐます。



## 孤 獨

小魚もゐない池に 糸をたれ……  
とつぶり日が暮れる

×

微動ない池の面に 小石を投る  
まろくひろがつてゆく波紋のなかに キラリ と はねた……  
あーそれは已れを投こんだしぶきだつたのか。

## 生 命

ひそやけき草むらに 花の咲きゐて  
ただ一本<sup>ヒトモト</sup>

×

弱々しき身を  
添竹にからませて  
朝顔はせいいつばいのびてゐる  
まづしいけど  
ちひさいけど  
パツチリ 元氣な笑顔で咲いてゐる。

## 地 上

大空の下に蔭がある  
蔭のなかには  
あかるい川が流れてゐる。



## 杉本英夫

## 農民の詩

稲の収穫を待たないで

田地を踏みつぶして工場が建つた

正直な農民だ

悲劇が多い

土地の買収で

先祖傳来の田地を奮はれたと

氣の狂つた老婆もある

小作人は田地をあげられて喰へなくなつた

資本主義よ

淳朴な農村を奪つて行き

農民の生活を目茶吉茶に劫やかす

こましやくれた町風が出来

昔遊んだ丘は富豪の庭園となつては入れない

おお、何處まで農民を不幸へと追ひたてるのか

虐げられた人たちよ

正しき道がある

それに驀進するのだ

## 砂丘

ごうごうと轟きくづれ



大地をゆるがし  
 驀進する怒濤

大海の底にひそむ力よ  
 それは絶へざる破壊と建設

おれは創造の砂丘に  
 渾身の力をもつて  
 足跡を印けてゐる

大地と大海と  
 おお偉大なる力を感じる

三 澤 彌

槐 エングレ

槐の花が乳色に垂れ咲く。  
 濕潤な碧空。  
 歡笑の遠くの音に、  
 血を吸ふ地獄画の影。

美感の中に溶けてゐる人々は  
 美しさを感じない、  
 腐つた花の附着した空からの花挿の爲に  
 槐の一枚を折り取らう。



田舎風景を讃えた友は此處を去り  
 徒に沈黙の中にすべり込む自然の風光は  
 私を引つ切りなしに泣かせてゐる、  
 室にあつて槐の花は何を語つて呉れるだらう  
 一時の榮華の様に  
 人は去り戀は消えるんだ。  
 ひめて黄昏の燈火の様に、  
 うすさびた季節に咲く槐は、  
 慰めを口語つて呉れるのか。

細 川 昊

白 雨

沛然と蹴散らして白雨が來た。

押し切りを使つてゐた手を休めて  
 雨足にみとれてゐるわしに

田圃おきからおつ父が

びしよ濡れで歸つて來た。



石川 榮一郎

シルエット

あなたの身体に這ひよるシルエット  
わたしはそれを見たくない。

白い雨が降ると、

心がをびえる、

わたしはわたしのシルエットに悩む。

消えて行くあなた

線だけがわたしの眼にのこる

一本のシガレットを燻らす時間の妄想。

詩佳人集



## 住川成子

## 短章

## 眞晝

烈しさ

この烈しを向日葵にたくして  
こともなく針を運ぶ眞晝

あの音は遠い雷鳴

何處かですさまじい嵐か

今日此處に吹く風はそよかせ

大輪の向日葵はゆれるよ。

## 失題

こころ弱ければよわたりのむずかしさ  
これも生活すべ

ひとすじに生きようと自らを慰め

愚かさは時として貧しさを嘆げき

疲れてかへるその人を淋しがらせる

黙りがちな夕餉のながさ

## 谷川

走る激流の想ひを愛す。

巖をうつその切なき心は我にも似て。



## 水上温泉にて

みなかみの香魚になりたや

はるばると山を越えて来てみれば

何んの想ひぞ

山は嵐 せせらぎは激流となり豪然と流れ

ここも亦ふるさとはないのか

眼を閉じ じつと電鳴を聴く

## 山 路

はるばると来た山はむせかへる緑の濃さ

この山路を何故に喘ぎ喘ぎ登らうとするぞ

しつとりと汗ばみ 息は切れ

老鶯の谷渡り 咲き残る山櫻のながめ あれはやすらかなひとのそらごと

あの峰へのはるかなる想ひは

足許をふみしめ ふみしめ

緑にぬれていつしんにのぼる



## 露木陽子

## 拒否する

よく、よくわかつて居る、

あなたの想ひは、どんなに切ないものであるかを。

飲めない酒を、強ひてぐいぐいあふるあなたを、

はては激しい罵倒が、嘲笑があなたの唇をついて出るのを。

ひとりだといふ、このはつきりしたさびしさ、

たそがれ、冷たい雨にぬれてかへるこの肉體の重たい疲れが、

愛するひとのためのものなら、

それでもどんなに嬉しからうといふ、心からなる私のあこがれ、

口笛を吹き乍ら、舗道を濶歩しても、

いそ／＼と仕事を娛しんで居るやうでも、

私はひとりぼつちのさびしいをんな、

戀をなくしたさびしいをんな。

意地ではない、やせ我慢ではない。

さびしさが私を喰ひつくし、なみだが双眸をくもらせるけれど、

私はあなたを拒否する、

はつきりと拒否する。

あなたは、私を失望させた――。



## 颯爽たる朝

若しかしたら、さうだ、若しかしたら、  
 私に新しい喜びをあたへてくれるひとかもしれない、  
 わらひ乍ら、静かに私の話す事を聞いてくれ、  
 わかつたよ、と、大きな手をさしのべてくれるひとかもしれない。

希望を以て、あふぐ青空、

喜びを以て、吸ひこむ大氣、

舗道を蹴る靴音はこんなに軽いし、

露にぬれて、樹々のみどりはこんなにあざやかだ。

あゝあの聲は百舌鳥、  
 なんとやさましい朝の歌だ。

(一九三二・一〇・一八)

## 女の歌

このねがひまことならば

いのちかけて

育てむと思ふ、

わが心の奥底ふかく

芽生えしねがひまことならば

水をも火をもいとはじと思ふ、

何故ぞ、ほゝゑみの湧きてたえぬは、  
 何故ぞ、ときめきの、未だ去らぬは。

(一九三二・一〇・一八)



## 井上淑子

居まよ

何か、私を威壓するものがあるだらうか。

うそだ、威壓なんかされぬ。

そうして、

何が恐怖で、

何が不安なのか。

堪へて、静かに私はこゝに在る。

— 十月 —

## 秋に

秋は、

底に、

何を沈ませてゐるだらう。

青ぞらと、

すがれた褐色の色彩。

私は生活の、今年の信仰を、  
今年の秋に沈ませてゆかう。

— 十月 —



## 影

それも、  
これも、影だ。

苦難の、努力の、闘ひの――。

年をふれば尊嚴の皺とともに、

それは私の顔の美と映えてくれるだらうか。

夢ではない、現實の影を刻みゆく頬だ、

花とも、匂ひとも、私はいとしみ讚える。

動かす、深く、重量あるもの、

美、ならずか。

醜いものはまだ外にある。

――十月――

## 運 動 會

赤も、白も、負けるな。

萬國旗がひたくと秋空にうたふ。

巧みも、傲りもない姿。

希望し、努力し、前進する聲。

汚されぬこの尊さの中で、

うましわが子は伸びる。

――十月――



## 岡村須磨子

## 身邊雜記

淋しい心を抱いて  
 重い頭をかゝへて  
 家に閉ぢこもる日のみつゞいて  
 花は青葉に變つてしまつた

便りのない友を案じつゝも  
 自から便もりせず  
 忘れられてゆくことを悲しみながらも  
 たゞ黙々として暮さなければならぬこの身境を深く考へさゝれてゐる

今は亡き兒に燈火をさゝげ  
 淡き香の匂ひをかぎ  
 黙想する自分の姿を  
 憐れとも狂はしいとも考へる

生きてゆくことの  
 餘りにも無力なのに  
 自から笑ひ  
 自からの、しり  
 見えざる運命のいたづらに支配され  
 時の運びにひきづられながら  
 花から青葉の道を  
 やがては紅葉して散りゆく道を



定められたところまで歩かされてゆくのだらう

(七・六・三)

### 兒は逝く

私は黙つて歩かされて来た  
 否自から黙つて歩いて来た  
 多くの眼が、誹が私を攻める  
 小さい一個の肉體は  
 死によつて白骨と化し私の胸に抱かれた  
 誰が死なせたか

千萬の涙が私の頬をつたふ

誰が我が兒を自から死に至らしめやうぞ  
 萬善をつくして及ばざりしものを

誰が私の罪と攻めるか

今はすべてのものが私の胸をおさへつける  
 だが私は黙つてすべての攻めに甘んじよう  
 たゞ私は一步先の運命の不可解を歎く  
 生が死に變じた事によつて  
 餘りにも人の心は變りすぎてしまつた  
 誰が我が子を自から死に至らしめようぞ

(七・八・二四)

### 秋

澄み渡つた秋の青空は窓の外  
 クリーム色の壁にはつたの葉



若い齒科醫は  
治療に機械を運ぶ

殺された神経が  
細い針の先からみつく

死んでしまつた齒は

不氣味な感覺を舌の先に傳へて

白い治療服はまぶしく反射する

秋の全神経は異様な支配に働きかけた

秋の風は後毛を顔になげかける

## 『秋』 後記

詩集社に最も親密な友人の援助を得、それに加へて『詩集』同人の作品をもつて、詩集社詞華集『秋』一卷を出すことが出来たのは非常に嬉しい。

先に詩集同人詞華集として『航海』及『閃光』の二集を出して、先輩友人諸氏から絶大な讃辭を得たが、詩集社の詞華集として出すのはこの『秋』が最初である。今後毎年かうして詩集社の全面的なものを出してゆきたらと思つてゐる。

私はただひたすら日本の詩人たちがよき詩を見せてくれることをのぞみ、更に身近くの詩集社同人達が、より強く進展し、飛躍することを望んでゐるものである。

全く、私は詩のために、全身的に生きてきた。詩集社の同人もこの精神をいつまでも失はないやうに、そして詩によつて人生をよく生きることが出来るやうに望んでゐる。



『秋』が理解ある人々の手に讀まれ、永く愛されるならば編者としての喜びは大きい。

昭和七年十一月十二日

井上康文

秋・集華詞

刷印 日八十月一十年七昭和  
行發 日十二月一十年七和昭

錢拾五價定

發編 井上康文  
行人兼

印刷者 長田正雄  
東京市下谷區上野公園不忍池畔

印刷所 帝都印刷社  
東京市上野公園不忍池畔  
電話下谷三六四番

發行所

東京市中野區沼袋南一丁目一五八一

詩集社

振替口座東京五八七九八番



著 子 陽 木 露

詩集

近代の眸

叡智の眸輝く近代的女性の苦惱と意慾を歌へる著者の  
第一詩集。恩地孝四郎氏装幀

定 價 壹 圓  
送 料 六 錢

東京市中野區沼袋南一丁目一五八一

詩 集 社